聖子は鳥になった

高橋和子

聖子は鳥になった

高橋和子

潮出版社

高橋　和子
(たかはし　かずこ)
1947年4月生まれ。
福岡県立浮羽高等学校卒業。
主婦。福岡県在住。

聖子は鳥になった　　定価900円

昭和60年7月20日　印刷
昭和60年8月5日　発行

著者　高橋和子
発行者　富岡勇吉

東京都千代田区飯田橋3—1—3
発行所　株式会社　潮出版社
電話(230)0781(編集)　振替5-61090
(230)0742(営業)　東京
〒102

印刷　図書印刷・栗田印刷　　製本　東京美術紙工

落丁・乱丁本は送料弊社負担でお取替えいたします。
©K. Takahashi 1985 Printed in Japan

聖子は鳥になった——目次

第一章　発病　7
小さな前兆　9／虹と産声　11／異様なシコリ　13／初七夕様　16／聖マリア病院　19／久留米大学病院　23／手術の日　26／悪性腫瘍　28／ガラス越しの面会　32／神様、見捨てないで　35
第二章　小児がん　41
お母さん、聖子はがんね？　43／私など生まれなければよかった　46／神経芽細胞腫　48／早期発見の道　51／家族への報告　54／髪の毛が抜けてきた　58／童話と劇団風の子　60／がんの子供を守る会　63／新しい年　66／学校には行かん　68／退院と復学　71
第三章　登校拒否と宣告　75
やーい、ハゲ人間　77／ふたりだけの終業式　80／お姫様のかつら　82／不安なスタート　84／登校拒

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

否との闘い 87／宣告の時 93／美由紀ちゃんの死 96／初めての運動会 101／ピンクのカーネーション 104／二年生をふり返って 108

第四章　松田聖子と対面

金魚作戦 113／再入院 115／恐れていた再発 118／思い出作り 121／深夜の緊急入院 124／NHKホール 128／ささやかな誕生パーティー 132／聖子、再発したよ 134／もう一度東京へ行きたい 137

111

第五章　生への闘い

治療再開 145／最後の外泊 148／屋根がふたつに見える 152／栄養チューブ 156／淳子ちゃんの死 158／治療が効いていない！ 160／この子の生命がほしい！ 164／ビデオの運動会 166／社会科見学 169／花と音楽 172

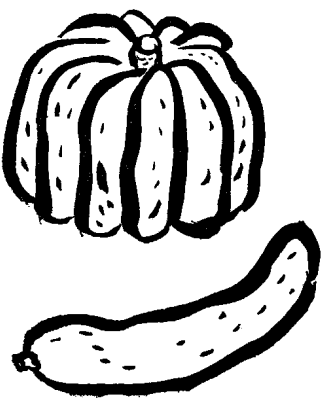
143

第六章　九歳四か月の戦死――175
病室のおくんち　177／楽しいお話して　179／くじ引き　181／兄妹の絆　183／痛みよ、伝われ　186／おうちに帰りたい　189／お母さん、怖いよ　192／ジュースが飲めない　196／早すぎる旅立ち　199／燃えつきた小さな生命　204／無言の帰宅　208／聖子は鳥になった　211
第七章　M・D・アンダーソン病院――215
ミセス・ストウとの出会い　217／機能的ながん専門病院　219／〝小さいヒロ〟の闘い　223／神様みたいな人　226／活発な病院学級　229／食事＝栄養の大切さ　231／水曜日のパーティー　235／崩壊する家族　238／日本へのお土産　239／新しい出発　243
あとがき　248
解説　柳田邦男　253

聖子は鳥になった

装画・本文扉カット＝梶山俊夫
本文カット＝高橋和子
装幀＝中島かほる

第一章　発病



げんきな子は
　ひまわりみたい
おひさまの下で
　げんきいっぱい　はねまわり
たいように　むかって
　すくすく　のびろー
（聖子との交換絵日記より）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

小さな前兆

さわやかな緑の風が吹く、昭和五十五年五月の昼下がりのことでした。

春から千年小学校の一年生となった長女の聖子が、学校から帰るなり「おなかが痛い」と言い出し、左上腹部を押さえて、かがみ込んでしまったのです。

給食が始まり、聖子はその給食をすませて、昼すぎに帰宅しました。食事をしたばかりなのでおなかが苦しいのかもしれないと思い、私は聖子を事務所のソファに寝かせました。

痛いと言うところを少し強く触ってみると、奥のほうに何か固い物を感じます。でも、それが〝腫瘍〟であるとは、夢にも思いませんでした。

聖子は、もともとちょっと神経質なところがあって、小学校に入ってから何度か、気持ちが悪いとか、吐き気を訴えたことがあります。慣れない学校生活に緊張しているのだと思い、私はとくに気にとめていませんでした。

「あんまり痛いようなら、お医者さんに行かんとね」

でも、おなかの痛みはほどなく薄らいで、その後聖子は、学校に休まず通い、友だちともよく

遊びました。
食欲もけっこうあるので、私は気になりながらも、もう少し様子を見てから病院に連れて行こうの繰り返しで、とうとうミンミンゼミの鳴く季節になってしまいました。
体育の授業は水泳になりました。聖子は保育園時代に泳げるようになっていたので、私は、プールで楽しく泳いでいるものと思っていました。
ところがある日、
「お母さん、プールに入るの、いやになった」
と言い出しました。
「どうして？」
「おなかが冷えて、気持ちが悪くなるとよ。ねえ、お母さん。今度のプール、お休みしていいね？　先生に〝具合が悪いからお休みさせてください〟と、お便り書いて！」
最初は怠けたくて言ってるのかなと思っていましたが、真剣な目で訴えます。
聖子の顔を見ると、本当に顔色がすぐれません。学校から帰ってきても、外へ遊びに行かなくなり、家の中でゴロゴロして本ばかり読んでいます。
暑くなって夏バテ気味なのかもしれないと思い、私は「少し疲れてますので、プールは休ませてください」と、担任へのお便り帳に書きました。
今思うと、病気の前兆は、すでに五月から初夏にかけて、徐々に現われていたのです。

虹と産声

聖子が生まれたのは、昭和四十八年七月五日の夕刻でした。予定日を一週間すぎていましたが、激しい夕立ちがおさまり、リズミカルに響くやさしい雨音を聞きながら、聖子は産声をあげたのです。

五体満足な体で産み落とした安堵感にひたっている私の耳に、

「ワァー、きれいな虹」

という声が、遠くのほうで聞こえました。

ようやく雨も上がり、きれいな虹が出ていたそうです。

体重は三八〇〇グラム。ピンクのマシュマロみたいな肌、指が長いのが印象的でした。

すやすやとおとなしく眠る子を見ながら、賢い子に育ってもらいたくて、主人と話し合い、聖徳太子の「聖」の字をいただいて「聖子」（しょうこ）と名づけることにしました。

聖子は、私たち夫婦にとって二番目の子で、二歳年上の大祐（だいすけ）、三歳下の有紀（ゆうき）の三人兄妹のまん中に育ちました。赤ん坊の時から手のかからないおとなしい子で、私のかつてのオテンバぶりを

知る〝悪友〟たちは、
「聖子ちゃんの性格は、どう見ても父親ゆずりとしか思えん」
と、みんなが口をそろえて評していました。
ふっくらした赤いほっぺに、くるっとした瞳——。ヨチヨチ歩きをする頃からよく気がきき、じいちゃんの顔を見れば、戸棚の中からウイスキーを出してきてサービスします。
そんな光景を、実家に行っては自慢気に話す平凡な母である私に、
「あんまり気のきく子は、先が恐ろしい……」
と、私の母が話をさえぎったのを鮮明に覚えています。

聖子は、本当に手のかからない子でした。何かに興味を示すと、ひとりでトコトン熱中しています。唯一の欠点は、たいへん人見知りすることでした。
打ちとけた人にはよくおしゃべりするのですが、初対面となるとまったく話ができません。口を真一文字にして、相手をまん丸の目でにらみつけ、心を開くまでに時間がかかります。そのくせ、よく相手のことを観察して覚えていました。
妹の有紀が生まれてからは、お姉ちゃんらしくよく面倒を見たし、後片づけもきちんとできるようになりました。
ある夜、おやすみの時間になって、親指チュチュの指しゃぶりをしながら、昼間遊んだおもち

ゃを片づけてないのを思い出したのでしょうか。ばあちゃんに、外までついてきてと頼んでいます。

「もう遅いき、明日でよか」

と言っても聞きません。

とうとう根負けしたばあちゃんは、寒い星空の下、懐中電灯を手に身をちぢこまらせ、ぶつぶつ言いながら聖子について行きます。

これは四歳の冬の思い出です。

異様なシコリ

聖子にとって小学校の初めての夏休みは、楽しいスケジュールでいっぱいでした。地元・東小江子供会主催の親子バス旅行、お父さんの友だち五組と海水浴へ。旧のお盆には、いとこが東京からやってきて、安富（私の実家）に一緒に泊まってキャンプやバーベキューをします。結婚十周年なので、夏休みの終わり頃に親子でヨロン島へ行こう……。

そんな計画表を見ながら話がはずみ、子供たちは、瞳を輝かせていました。

でも、楽しいスケジュールの中にひとつだけ、ちょっぴりいやな予定を入れておかねばなりませんでした。聖子の扁桃腺の手術です。長男の大祐は鼻炎、聖子は扁桃腺肥大とアデノイドの治療をするように、学校から通知があったのです。

夏休み前に耳鼻科に行った結果、大祐は一週間ほどの通院治療となりましたが、聖子の扁桃腺はイチゴ大になっていたため、夏休み中に取ってしまうことになりました。

入院、手術の日は、七月三十日に決めました。初参加を楽しみにしている子供会の親子旅行の翌日でした。

聖子には内緒にしていたので、大祐の治療についてきて、不思議そうに聞きました。

「お兄ちゃんは、ミミ屋さんでいつも鼻を診てもらうけど、私は一回だけで、何も(治療)せんでいいと？」

わが家の子供たちは、耳鼻科をミミ屋さん、歯科をハア屋さん、眼科をメエ屋さんと呼んでいました。

「お兄ちゃんは、鼻炎という鼻の病気でね。毎日、消毒のお水で洗ってもらって治すとよ。聖子は、扁桃腺といって、ノドの入口のあたりが悪くなっているから、まとめて一日で治してもらうことにしたとよ」

「ワァー、一日で治るね？　お兄ちゃん、私、一日で治してもらうとよ」

まさか手術するとは知らずに、一日で治ると聞いて、聖子は大喜びでした。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c